



中村俊定文庫
文庫 18
188



鼓のやうな光の玉の
 粧んく皆のゆねさるる
 玉不様なゆふの神音有柳川
 味も確とらふ清あまなり
 南方の薄皮一重下まも
 兵草よけい合の入笈
 中片乃路りゆり冬至柳
 乃布糸と南をたうかおり
 お布糸一重北月星のくに
 揚賀
 笑鴉
 扇女
 雨下
 保水
 一糸
 如翼
 松甫
 柳坡

入江より吹く秋の秋色
 なる安乃口のまをりや扱
 牛馬小賢愚りつ連るり
 雲芽て浴室を花の鏡
 笈一とく糸草乃笈
 病めりく都の佐保姫杖の
 玉福の天柱乃朝子結る日
 三月居て髪小公の松屋
 富士より花子より妹の何
 丸雪
 猩々
 難助
 桔梗
 可敬
 笑鴉
 如翼
 一糸
 猩々

多とやふふ場へは袖はまき入
 下手力ふあふかかれり 掉
 子母界あもねらうき冬牡丹
 凍すはら 柳子少 腋
 雑の部の鈴子旭乃長深之
 一川と堀を履き尉よ
 八九百の川の川い蛇つり
 け道もろり 執ふまかた
 月子家部目方部友情て
 雨下 保水 可敬 榻賀 如翼 笑路 丸雪 扇女 松甫

秋と銀さけ夕更て昔
 加る新の袖ももろり 魂
 鏡一 扱る七十一乃系
 言れい素引の指ふ雪風知
 私といあまいみうかあ信
 せまりてい足と筆とぬすり
 神の施乃奇こりり 尖
 むと汲舟あり池あり良の雨代
 弁 又うつろ 蝶の道さし
 拮挾 櫻賀 雨下 保水 柳坡 難助 一絲 猩々 扇女

貞享五年のち探九子代君別墅
乃花見修るを母まのりる子むの
跡とらふく西

さほくのすみ出佐る哉

桃音

まの目くやく等子等子

探九子

翁と中丸雪子乃所家より出て
せう唱りぬまのぬ志うら子探九子
探九子雪窓子ん三代お續ては道
乃幽妙と極さたす小今の丸雪子
も又祖の風流ありあつてはぬまひて
家門より致くせり

十界句合

一番地獄 右勝

炭焼や己とむまお 扱れ声
とくおねや殺生を乃むく行る

松申
虚ト

晋子曾て杜甫く一字血脈の格を以て
句の語あり己とり子一字一句の中
つねいてく骨とあり體とあり
ア炭やまことてむく叶ふ(まの)の
あはれもれ佳ひのてく(まの)めく
海ねるるく又まのまの行るゆに
市妻昂妙の地獄ふし七一句の萬古
く(まの)殺生をハ野子的中して
印達乃思ひよりながつて尔をく
云ふつ(まの)が(まの)依て右小
あへて甲乙あま(まの)もあはれ

二番餓鬼 左勝

一ノ遊りかとも落も人伐場

水カ

大刀のや水おとけつる星月夜

省我

る本を歎き座万像まゝふとく
そがぬ刺すの銀樹刀山と見え
いほしは修匠の業感なるへ
一向骨つゝく余情をみそりあふ
遊り空月あふ中七文字乃
しら他もたきのゆきまふ
あしはれぬいふかたの遊群ある
しけけさ終ゆるその降級今
兼盛忠岑あふとくせふまひ
ゆきともさうまわりのゆきまひ

五番 人間 右勝

遊き一四民の外いよほきめ

先行

遊め又つれさるや六の 毛

麟子

四車乃生業ぬ故下して空山虚
谷乃因ぬし受て彼山山の志流
直下三千尺指若根河落九天
化まゝ勺の味いと余亦な
と煙著泉石ぬ甘すう生海どか
くハ野子れとひもさふなるへし
ふれ又とに一向の活路ひけ
てゆとれ向上の骨勢常人の工
夫乃及さる亦なり可哉妙我大
又つ乃らましりさるをとりふ口
指子ぬし上又字あとい情
あれとちまひあふか

六番 天上 右勝

羽衣の舞や小二階冬乃月

梯賀

々々日初や舞人弾人の神意

東也

羽衣了一月と流し越向彼乃
明皇月三の一曲なりねと云ふ
多すのうらなゆえ小二階を一他
の物しことせりたはる影と
言すは舞人弾人の事あり有

七番 声聞 右勝

系は尺々かみあし月の影は仰

百尺

風乃招や五百れ中具と舞心

貴之

こは髪系頂ハ声聞のこ乃みよのこ
きり菩薩の修り者神より有聲
ありかみあし一月の二倍よりあり
して影より叶へる八百四十一

舞人の内かみあし惟特結縁の
神おはれ何となく一かれ中子とい
つてやうこれ英事の発動するこ
まはあしん又百座舞のたをくら
あしこまあし吹あしありと云
たりしとまことなりと云う一白の
とくくくくくあしれく

八番 縁覚 持

覚くく好志れ縁あし 橋炭

志野

不々々あしつれうう路の影

志野

縁覚乃極果ハ水恵處の銀子入
アア化身滅智するありあれと
婆沙訪俱舎訪多くと持きた
不草焦ある柱子多くと云う

さくし岩の極向きより出るる白
中縁の二文字の結入て洞つを
出さやと云れり此中一文字の縁を
得たりたは此火屋兼十二因
縁の縁を記する縁を一句
にありて野公記しるを中七
字にてもしあまを之を撰り世を
うけ山のて居る音かかひて居る
庭をあらと云ふんぬりてぬり
主人乃もつますありて伊の
左先とも不測ぬぬ調ありて
徑深からぬ一信ておとけり

九番 菩薩 天勝

縁を結二十又結五助あり

其山

波能者のい乃助能有發哉

笑路

二十又縁ハ音もあらぬ一
少題一乃ありらひある言と
流音樂や二十又縁う言れぬ
節くあらまかり古波能者の
薩の修りする是一句神位の
と字ハ竹

十番 佛 天勝

雪山乃掌う於小六有

白也

月おや四十九年此代宗

可致

雪山乃掌分修の御ありとも
又つるたのん菩薩提樹下神成道
ありてなり双林并滅をいふる
まよきく四十九年乃設法法派
かり縁縁の佛を發して其明
山上ノ大は炸形形海開く此後士

世々かえさるる露の集虫
 短檠の灯は灯と四角めて
 窓より俗の月画ちり
 様漕く社と知り 独旅
 風をよと物なれり 桐
 干物を鶯のくち尾をかき海に
 帰より好の白のさむさ
 無おもすより北奥北照より
 うゝ玉面成旅をて 切

大津
 松毘
 宰陀
 槐眠
 湖祢
 之水
 松毘
 宰陀
 槐眠
 湖祢

露の粒の垂をせりふく二柱
 茶室乃下地消く日くは
 肌をよとと 眩光も他て
 うゝふうつに 影をけをく
 月皓の海くはる 廻つて
 すゝとと 親の乳をのまけり
 さゝふい 磨くぬくつて合
 次へいこ ちみくまふぬ

狸々
 松毘
 之水
 槐眠
 湖祢
 狸々
 之水
 宰陀

源氏畧又

追加 古人今人の白浪語
追若懐旧の意をいふ

表之部

晋子 桃隰 鞭石 菅曲 沾徳 方設
吹とおし様のを乃師走以 矢指 赤う人うそあ 様物 神午の馬芝かけうら古留

仙鶴 輕人 馬周 湘十 山夕 谷心 程々 信安 省我
初午や暮子踏子筑波山 初午や夜中おし次星月夜 神午の山燈いや 井 鏡 曇りの猿人思もや清閑寺 蝶つふふますかふと指しあや様 此下福もありや二月の女市 二月や 縁う 捜ふ秋の夜 信 彦 む 路 川 住 吉 歳 相 暗 味 神 ち 七 糸 の う し 鳥 籠 意 の

岩より日や海をさす神の歌
 吉野龍田二り四りか 柳の酒
 ハ増落や千々任吉の味子鳥
 ぬ上北極の志多や 芥の香
 枯川の志多とさく入まらつら
 千の香うぬあきり 生駒山

友之部

ぬ甲月や半涼を 手此香
 照しう糖よまらう海 尉く魚
 子英

ぬくくお探不卯月乃の町多
 ぬくくお探不卯月乃の町多
 本殿ていをおくここの節云
 ぬ垢離のけえもさく別れ家
 人おの鏡よあきふ 草かぬ
 虫千々涼しき物いあうり
 ぬいさき女針うまらぬ
 夢吹や蝉子ゆらるい川家
 ぬの宵もあふとや長き草標

大鵬の如く羽やつる心深き
 笑ひ玉け沸く海一ほら
 多れ系やとくさぬのち
 蟹牛
 せりねま中子むら根穀植
 月ハ山北下鏡免く
 公覃
 手ぬくぬかつと空をわみ月而
 黒布紗衣のつれて来れ雲か
 心ゆく遠思終つて卯の星
 涼しや指と糸乃ふか又
 伊豆
 笑玉
 伊豆
 鱗子
 口
 燕説
 口
 ぬ玉
 越前
 暮琴
 伊豆
 雪點
 伊豆
 指凡女
 京
 扇女
 京
 方鼓

初神く前草子海一松の雲
 風微まり高柳子蜂の神時系
 雲のりや紙端を兼てお持小
 伊豆
 文隨
 伊豆
 省我
 口
 握々

秋之部

天人れも拭とうる風の家
 人ハすま一積あるとく
 好の月
 吉也氣の籠て白一秋れ雲
 大坂
 鬼貫
 口
 才磨
 江戸
 沾涼
 唐れ吉也く川原星北川

ねふ力を矢指葉こりおの月
 踊おや栲のふききつとぬあり
 けとあふふありの文一何栲外
 横やや躍く川を栲の音
 ねとてぬらぬ仕粧は暖や園地
 塊のねや柳乃るきと弁の鳥
 尾雲や沢やある くの音
 若月ハ峰と及ぬ 木末外
 嵐雪
 一漁
 狸々
 可敬
 鱗子
 方山
 暮四
 万江

冬之部

侍ハ脈さえ切子 火煙うら
 弓子あつ津に布毎形栲の音
 ぬるいそに尺や女更地雪地装
 いそそわら役子鹿鳴く脚を外
 沙照りやせ約武庫山二一々終
 心や夢遊しと那智北寺
 友の舌とありや京北程おの毛
 大京葉かつさかふ一室北取粉
 常と見幾お子多る至る音と場
 義徳 文考
 治徳
 九梅
 雲鼓
 沙々
 伊心
 眠然
 晚山
 暮四

衣たてしゆへ苦とくは取らむ
 馬少と憎氣すく新しき此風
 洒士乃雷乃産てきくもや書此
 里を一室を八斗此書此書
 ゆく神やしんれを法の事神
 ありれいといふく雷ぬへ一雷を
 心やうーる子市いあう
 字声や湖あすすく里の
 鬼乃眼子乃好まきやまわつと

伊賀 良品
 口 狸々
 伊賀 座神
 越前 立儿
 伊賀 鱗子
 口 貴之
 伊賀 燕説
 口 虚卜
 伊賀 省我

光陰了負成良弦や 神時
 乙の柴孔流色かえん神れ
 猿飛て一校書し書此 松
 落て葉の楯此子子一陸の波
 すくゆさ考の住極やみ此有
 経年考く書し季ハあ 名此海
 麻服の膳すくすく小蛇子
 町至りまか度すくすく小の書

口 桐雛
 山田 乙由
 口 因友
 口 賞山
 伊賀 金扇
 口 狸々
 長崎 宇麻
 京 信安

伊賀	越前	武島
江島	根島	羽島
山城	肥前	信島
大和	勢島	野島
濃州	凡十三國	

伴 功 右 田 氏 将 子 八 密 晋 齋 門
 門 不 入 々 得 年 末 の 去 弟 也 去 々 々 々
 去 弟 丸 の 風 を 羨 心 を 去 々 々 芭 蕉 翁
 の 海 を 汲 々 花 小 流 心 月 小 浦 々 々
 上 野 府 小 池 場 を 臨 心 々 々 子 子
 鳴 々 々 々 蓑 翁 一 曆 日 蓑 翁 三 十
 三 回 の 遠 忌 小 追 善 一 法 好 土
 乃 佳 句 著 々 干 集 福 一 一 一 一
 題 を 伴 笑 の 々 々 少 物 と 心 人 一 一 一
 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
 ず の 謂 々 々 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

善思を謝するより大志大行や
何うけう一あらん早往昔御
の因縁あるを以て需ふ意
不支の事とさるるなり

享保のと

洛陽

榎野齋後



